

京都大学	博士（地域研究）	氏名	中村沙絵
論文題目	スリランカのヴァディヒティ・ニヴァーサ（高齢者の家） —施設における老いと扶養に関する人類学的研究—		
（論文内容の要旨） 本論文は、スリランカ・シンハラ社会におけるヴァディヒティ・ニヴァーサ（<i>vādihi ti nivāsa</i>、高齢者の家）と呼ばれる施設に関する研究である。その目的は、ヴァディヒティ・ニヴァーサの成立をめぐる歴史的考察と、そこで暮らす高齢者を取りまく相互行為の微視的記述を通して、家族・親族の外部における老いと扶養の実践を、それを可能にする文化的装置との関連において捉えることである。 本論文の構成は以下の通りである。 序章では、本研究の背景を述べたのち、①施設研究、②南アジアの老いをめぐる研究、③慈善研究の議論と問題点を整理しながら本研究の課題を示している。 第1章から第3章までは、ヴァディヒティ・ニヴァーサを取りまく政治経済社会的文脈を記述しながら、その社会的位置づけを考察している。 まず第1章では、調査地の概況、とりわけ調査期間中のスリランカにおける政治社会的文脈に触れている。また、本論文が対象とする「シンハラ」社会の特質を、先行研究をもとに検討している。 第2章では、シンハラ社会における家族・親族関係における老いと扶養の実態を、先行研究の検討と、島北西部にある一農村社会でのフィールド調査から明らかにしている。家族成員の国内外への離散という一般的な傾向が認められる一方、長期的相互扶助の論理に基づく扶養が実践されていることを明らかにし、世代間関係は決して静態的なものではなく、むしろ現代的な葛藤や工夫に満ちたものであることを示している。 第3章では、こうした変容のなかにあるスリランカ社会を、国家主導による「高齢者福祉」という観点から捉えている。従来「家族主義」を軸に据えてきた国家は、徐々に政策転換を図りつつあった。しかし、予算増大が見込めない中、ヴァディヒティ・ニヴァーサなど社会的領域に大きな期待をよせていた。ヴァディヒティ・ニヴァーサの社会的位置づけが高まるなか、それは自主的な運営を要請されているという点を示している。 第4章では、その自主的な運営がいかにして可能になっているのかを探るために、施設外部の一般の人々による食事の布施（ダーナ）を媒介とした運営形態が成立した歴史的過程を考察している。この運営形態が、英国植民地期に台頭した土着の富裕層たちが事業を経営する中、安定的な収入の必要性に駆られる中で考案されたものであることを明らかにした。ダーナを通して慈善事業の土着化が起きたことが、寄附者が自由に施設内外を行き来し、入居者と交流するような道具立てをしたこと、更にそれによって、身寄りのない高齢者を扶養する仕組みの土台が築かれたことを示している。 第5章から第7章にかけては、①ダーナ実践、②個々の入居者の語りと日常生活、③死と看取りという3つの主題において、施設で起きていた相互行為の微視的記述を通じて、			

そこでの老いと扶養が何に支えられているかを考察している。

第5章では、ヴァディヒティ・ニヴァーサにおけるダーナ実践に着目し、その相互行為における関係性の揺らぎと行為者たちにとっての意味を考察した。ダーナは入居者をかわいそう（パウ）と思う気持ちから誘発される贈与行為ではある。しかし、「篤志家」と「憐れむべき入居者」という関係は、具体的な実践を通して、双方向的な配慮の関係や、敬信にもとづく関係などにも変容しうるものであった。この関係性の揺らぎにおいて、倫理作法や美的感覚を内包した行為としての「ダーナ」のもつ遂行的な作用が重要であることを示している。

第6章では、一つの調査施設（MJSニヴァーサ）で生活する複数の入居者たちの「人生の物語」（ライフ・ナラティブ）と日常生活の記述を通じて、ヴァディヒティ・ニヴァーサで老いを生きるという経験に接近しようと試みた。個々の入居者の事例を通して、彼らが身体的不調といかに付き合い、喪失や苦悩に折り合いをつけるにあたって、周囲とどのような関係性を構築し、それらを意味づけているのかを描き出している。

第7章では、MJSニヴァーサにおける死と看取りの記述を通して、家族が介在しない看取りという特殊な状況において、行為が如何なる自他認識のうちに、またいかなる論理において展開しているのかを考察した。職員たちの実践とともにあったのは、看取られるものが受苦的存在として看取るものたちとかけ離れていない存在となる自他の連続性に対する感受性であり、その地続きの観点から立ち現れる共感であったのだと論じている。

終章では、入居者たちをとりまく相互行為に通底していたのは、相手を「パウ（かわいそう）」と捉えながら、同じように不確定な生を歩む他者として連続性のもとに捉え、目の前の相手に関与するという態度であった、と記述している。ヴァディヒティ・ニヴァーサに入った高齢者たちは、そもそもよそ者同士であるような人たちの中にあっても、扶養され、そこで看取られながら死を迎えている。このような状況が可能になるにあたって、とりわけダーナを通じたチャリティの土着化という発明と、目の前にいる他者への関与を意味づけまた誘発する「パウ」といった文化的装置が大きな働きをしていたと論じている。